

Subject : **Japanese**Production of Courseware  
e- Content for Post Graduate CoursesPaper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**Module 27 : **話し言葉と書き言葉 (Spoken and Written Language)**

ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये

**Development Team****Principal Investigator:****Prof. Anita Khanna**

Jawaharlal Nehru University, New Delhi

**Paper Coordinator:****Prof. Prashant Pardeshi**

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

**Content Writer:****Prof. Hideki Kishimoto**

Kobe University

**Content Reviewer:****Prof. Prashant Pardeshi**


The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Japanese

Japanese Linguistics

話し言葉と書き言葉 (Spoken and Written Language)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	話し言葉と書き言葉 (Spoken and Written Language)
Module ID	JPN-P02-M27
Quadrant 1	E-Text

 **Pathshala**  
पाठशाला  
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

話し言葉と書き言葉 (Spoken and Written Language)

## 話し言葉と書き言葉

目的：このモジュールの目的は、話し言葉と書き言葉の違いを解説するとともに、この2つがどのような文法的な特徴をもつのかについて紹介することである。

### 1. 「話し言葉」と「書き言葉」とは？

ことばでなにかを表現する際に使用されるスタイルがいくつかある。特に、話し言葉と書き言葉の間には、表現方法にかなり大きな違いがある。話し言葉は、日常的な会話をする時などに使用されるあまり堅苦しくない表現法を指す。書き言葉は、正式な場面で使用される表現法を指す。話し言葉は、実際の会話でのみ用いられるとは限らない。日常のことば使いをする手紙、メールなどに使用されたり、小説に書かれている会話の部分で話し言葉が用いられたりするからである。また、書き言葉も、改まったスタイルの表現法であるが、必ずしも書き物の文章にしか使えないというわけではない。学会の口頭発表などの公的な場面では、通常、改まったスタイルの書き言葉が使われる。

話し言葉と書き言葉には、かなり多くの異なる文法的な特徴が認められる。話し言葉と書き言葉は、状況に応じて使用法が変わる。使用する状況に依存する表現

は、場面ばめんに合わない誤あった使い方あやまをつかすると、不適切ふてきせつであると判断はんだんされる。たとえば、  
 論説ろんせつなどの文章ぶんしょうで「それは大変興味深いたいへんきょうみぶか」とすべき表現ひょうげんを「それはめちゃくちゃおも  
 しろい」としてしまうと、状況じょうきょうにそぐわない不適切ふてきせつな表現ひょうげんとなる。しかしながら、  
 そのような表現ひょうげんでも、場面ばめんによっては適切てきせつであると判断はんだんされる可能性かのうせいがある。したが  
 って、場面ばめんにそぐわない不適切ふてきせつな表現ひょうげんが文法的ぶんぽうてきに間違まちがっているということいを意味いする  
 わけではない。

## 2. 文末表現ぶんまつひょうげん

日本語にほんごには、「だ」体たい、「である」体たい、「です、ます」体たいと呼ばれる文体ぶんたいがある。  
 これらの名称めいしょうは、それぞれの文体ぶんたいに特徴とくちょうてき的な文末表現ぶんまつひょうげんにちなんでつけられた名前なまえで  
 ある。(1) から (3) は、それぞれ「だ」体たい、「である」体たい、「です、ます」体たいの代表例だいひょうれい  
 である。

- |                                    |                                |                               |   |
|------------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|---|
| (1) それは問題 <small>もんだい</small> だ。   | 彼は静か <small>かれ しず</small> だ。   | それは美 <small>うつく</small> しい。   | 本 <small>ほん</small> を <small>よ</small> 読む。                    |
| (2) それは問題 <small>もんだい</small> である。 | 彼は静か <small>かれ しず</small> である。 | それは美 <small>うつく</small> しい。   | 本 <small>ほん</small> を <small>よ</small> 読む。                    |
| (3) それは問題 <small>もんだい</small> です。  | 彼は静か <small>かれ しず</small> です。  | それは美 <small>うつく</small> しいです。 | 本 <small>ほん</small> を <small>よ</small> 読み <small>ます</small> 。 |

「だ」「である」「です」は、いわゆるコンピュータ（けいじ はんていし へんいけい 繫辞，判定詞）の変異形であり、  
めいし けいようし けいようし けいようし けいようどうし ふか 名詞やイ形容詞（形容詞）やナ形容詞（形容動詞）に付加することができる。「ます」  
どうし ふか めいし けいようし は動詞に付加することができる。3つのスタイルは、名詞につくコンピュータ，イ形容詞  
けいようし けいようし けいようどうし どうし けいしき こと けいようし けいようし（形容詞），ナ形容詞（形容動詞），動詞で形式が異なる。ただし，イ形容詞（形容詞）  
たい たい くべつ どうけい どうし たい は、「だ」体と「である」体に区別がなく，同形になる。また，動詞も「だ」体と「で  
たい どうけい ある」体が同形になる。

(1)~(3)の3つの文体は、ぶんたい じょうきょう つか わ か ことば しょう 状況によって使い分けられる。書き言葉が使用される、  
しょうせつ ろんせつ しんぶん ほうこく か もの たい 小説，論説，新聞のニュース，報告などの書き物では、「だ」体あるいは「である」  
たい もち おお ろんぶん がくじゆつてき か もの たい つか 体を用いることが多い。論文・レポートなど学術的な書き物では「だ」体はあまり使  
たい けんちよ もち はな ことば しょう われることはなく、「である」体が顕著に用いられる。話し言葉が使用される，たい しょう くだけ  
にちじょうかいわ たい もち はな ことば しょう かいわ てがみ た日常会話などには「だ」体を用いる。しかし，話し言葉が使用される会話や手紙で  
き て よ て たい はいりよ ひつよう ばあい たい しょう も，聞き手や読み手に対しての配慮が必要な場合には，「です，ます」体が使用される。

「です，ます」体は，たい きほんてき しゆせつ つか 基本的に主節でしか使うことができない。したがって，(4)の  
めいししゅうしよくせつ みちび じょうけんせつ なか じゆつご けい 名詞修飾節および(5)の「なら」で導かれる条件節の中の述語を「です，ます」形  
 にすることはできない。

(4) [私<sup>わたし</sup>が<sup>か</sup>買った<sup>か</sup>/\*買<sup>か</sup>いました]本<sup>ほん</sup>

(5) [彼<sup>かれ</sup>が<sup>すす</sup>勧<sup>すす</sup>める/\*勧<sup>か</sup>めますなら], それを<sup>か</sup>買<sup>か</sup>いませう。

(\*のマークは非文法的であることを示す。)

(4)や(5)の例が容認されないことから、複文中に埋め込まれた環境では、「です、ま

す」体は基本的に使用することができないことがわかる。しかし、複文においても

逆接の接続助詞「が」で導かれる節の中では、(6)で示されるように「です、ます」

形の述語が現れてもよい。

(6) その<sup>ていあん</sup>提<sup>ていあん</sup>案<sup>あん</sup>は<sup>さいよう</sup>おもしろい<sup>さいよう</sup>ですが、採<sup>さいよう</sup>用<sup>さいよう</sup>できませ<sup>さいよう</sup>ん。

(6)において「が」で導かれる節は、右側の主節とほぼ同じ環境にあるため、「です、

ます」体の使用が可能なのである。また、(7)のように「言う」によって導かれる埋め

込み節も同様に「です、ます」体を使用することができる。

(7) 山<sup>やまだ</sup>田<sup>やまだ</sup>さん<sup>さん</sup>は<sup>ひと</sup>[あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>が<sup>い</sup>そこ<sup>い</sup>に<sup>い</sup>行<sup>い</sup>きませ<sup>い</sup>う]

「<sup>い</sup>言う」などの<sup>でんたつどうし</sup>伝達動詞は、<sup>いんようせつ</sup>引用節をとることができる。引用節は、<sup>いんようせつ</sup>埋め込み節の一種ではあるが、<sup>しゅせつ</sup>主節と<sup>きほんてき</sup>基本的に同じ<sup>おな</sup>環境になるので、(7)のように「<sup>たい</sup>です、<sup>ぶん</sup>ます」体の文が<sup>あらわ</sup>現れてもよい。

話し<sup>はな</sup>言葉では、文が<sup>ぶん</sup>談話上で<sup>やくわり</sup>どのような<sup>は</sup>役割を果たすのかを<sup>してい</sup>指定する「よ、ね」などの<sup>しゅうじょし</sup>終助詞が<sup>ひんぱん</sup>頻繁に<sup>つか</sup>使われる。終助詞は、文の<sup>しゅうじょし</sup>記述内容<sup>ぶん</sup>自体を<sup>きじゅつないようじたい</sup>変えないが、<sup>か</sup>談話上<sup>だんわじょう</sup>の<sup>き</sup>機能を<sup>してい</sup>指定する<sup>はたら</sup>働きを<sup>にな</sup>担っている。したがって、文の<sup>ぶん</sup>談話上<sup>やくわり</sup>の<sup>きてい</sup>役割を<sup>ひつよう</sup>規定する<sup>必要</sup>の<sup>か</sup>ない<sup>ことば</sup>書き言葉では、<sup>しゅうじょし</sup>そのような<sup>しょう</sup>終助詞は<sup>使用</sup>されない。

(8) <sup>もんだい</sup>それは問題だね。

(9) <sup>もんだい</sup>それは問題ですよ。

(8) の文は、<sup>ぶん</sup>相手に<sup>あいて</sup>確認をとるために<sup>かくにん</sup>使用される「<sup>しょう</sup>ね」が<sup>つ</sup>付け加えられている。(9) の

「<sup>き</sup>よ」は、<sup>て</sup>聞き手の<sup>ちゅうい</sup>注意を<sup>ひ</sup>引くために<sup>しょう</sup>使用される<sup>しゅうじょし</sup>終助詞である。終助詞が<sup>しゅうじょし</sup>ついた<sup>ひょうげん</sup>表現は、<sup>だんじょさ</sup>男女差を示すことがある。(9) の<sup>はな</sup>話し言葉の文は、<sup>ことば</sup>典型的に<sup>ぶん</sup>男性が<sup>てんけいてき</sup>使用する<sup>だんせい</sup>男性<sup>しょう</sup>言葉である。しかし、これを「<sup>もんだい</sup>それは問題ね」や「<sup>もんだい</sup>それは問題だわ」<sup>じょせい</sup>とすると、<sup>もち</sup>女性が<sup>じょせい</sup>用いる<sup>ことば</sup>女性言葉となる。

(8) と (9) の例が示しているように、「だ」体であっても「です、ます」体でも終助詞を付け加えることが可能である。「ね、よ」などの終助詞をとまなう表現の使用は、話し言葉に限られる。談話機能を指定するのみの終助詞は、書き言葉では使われないが、疑問を表す終助詞「か」は、疑問文を作るために必要となるので、書き言葉でも話し言葉でも使用される。

### 3. 語彙

書き言葉には書き言葉で使用される語彙があるように、話し言葉にも話し言葉で特徴的に使われる語彙がある。したがって、用いられる語彙により、書き言葉であるか話し言葉であるかの違いがわかることが多い。書き言葉と話し言葉で明確に区別される表現は、文法機能を表す機能語に特徴的に現れる。しかし、実質的な意味内容を表す内容語であっても頻繁に使用される強調語などに、そのような特徴をもつものがある。

まず、話し言葉で典型的に使用され、書き言葉では使用されない機能語はかなり多い。通常の名詞や動詞には、そのようなものはあまりない。(10) は疑問詞、(11) は指示詞、(12) は接続助詞が、話し言葉と書き言葉で異なることを示している。(矢印の左側が書き言葉で右側が話し言葉)



(10) なぜここにいるのですか。 → なんでここにいるのですか。

(11) こちらにあります。 → こっちにあります。

(12) ためにはなるが／けれども、楽しくない。 → ためにはなるけど、楽しくない。

ひんばん しょう きょうちょう ぎやく よわ い み あらわ ふくし なか はな ことば か  
頻繁に使用される強 調やその逆の弱めの意味を表す副詞の中にも、話し言葉と書き  
ことば ちが あらわ やじるし ひだりがわ か ことば みぎがわ はな ことば  
言葉の違いが現れる。(矢印の左側が書き言葉で右側が話し言葉)

(13) 決してそこには行かない。 → 絶対そこには行かない。

(14) 非常に／大変楽しい。 → すごい／すごく／めっちゃくちゃ楽しい。

(15) あまりうれしくない。 → あんまりうれしくない。

(13) と (14) は強 調の副詞の例で、(15) は弱めの意味を表す副詞の例である。「決し  
て」「非常に」「大変」などは書き言葉に特徴的に使用される。これに対して「絶対」

「すごい／すごく」「めっちゃくちゃ」などは話し言葉で使用される副詞である。なお、

「すごい」は、もともとイ形容詞(形容詞)であるが、話し言葉では、強 調の副詞と

して用いることができる。「すごい」の連用形の「すごく」を、同じように強 調の

副詞として用いることもできる。

はな ことば けんちょ かんさつ げんしょう しゆくやく いじょう ご ちぢ  
 話し言葉に顕著に観察される現象に「縮約」がある。これは、2つ以上の語を縮め  
 いちご もち ひょうげんほう しゆくやく ぐたいてき  
 て、あたかも一語として用いる表現法である。縮約には、(16)~(18)のように具体的  
 ないよう も きのうちご かか おお やじるし ひだりがわ か ことば みぎがわ  
 な内容をあまり持たない機能語が関わることが多い。(矢印の左側が書き言葉で右側  
 はな ことば  
 が話し言葉)

(16) それを言ってはいけない。 → それを言っちゃいけない。

(17) パンを買っておいた。 → パンを買っといた。

(18) 少し考えなければいけない。 → 少し考えなきゃいけない。

(16) は、題目の「は」が関わる現象で、「ては」が「ちゃ」に縮約されている。(17)

はテ形動詞が補助動詞と組み合わせられる際に観察される縮約現象の例である。(17)で

は、「ておく」が「とく」に縮約されている。テ形動詞の関わる縮約については、

「歩いている」を「歩いてる」, 「買ってしまう」を「買ってちゃう」など、後ろに来る

補助動詞により形が異なってくる。(18)は条件を表す表現で、「なければ」が「な

きゃ」に縮約されている。肯定の条件表現「食べれば」は縮約されると「食べりゃ」

という表現になる。

ぐたいてき い み ぶんぼうかんけい しめ かくじょし か ことば お  
 具体的な意味がなく文法関係を示す格助詞は、書き言葉で落とされることはあまり

はない。しかし、話し言葉では、格助詞の脱落は頻繁に起こる。

(19) それ、<sup>た</sup>食べたよ。

(19) の「それ」には、助詞の「を」が現れてもよいはずであるが、実際には現れて

いない。(19) のように、文頭で助詞の脱落が起こった場合には、「それについては」と

いう解釈がなされ、題目の意味が読み込まれる。文中でも名詞の文法関係が文脈上

でわかる場合には、格助詞が脱落することもある。

語順についても、話し言葉は、書き言葉と比べて自由度が高い。話し言葉では、

一般に、談話上重要な要素が前方に、あまり重要でない要素が後方に置かれる傾向

がある。また、話し言葉では、談話上の効果から、通常の文法の制約を逸脱した使い

方ができることがある。(20) は後置文の例で、書き言葉では通常起こらないが、話し

言葉ではしばしば観察される。

(20) おもしろくなかったよ、この本<sup>ほん</sup>は。

(20) は、本を手にとっている状況でコメントとして発するような文である。この場合、「おもしろくなかったよ」だけで文を完結させてもよい。しかし、(20) では、何がおもしろくないのかという、それほど談話的に重要でない情報をもつ表現がコメントとして述語要素の後に置かれている。

また、後置文では、(21) で示されているように書き言葉では切り離すことができない要素を後置要素として置くこともある。

(21) 公園に女の子がいたよ、髪の毛の長い。

(21) の後置文は、もともとは「公園に髪の毛の長い女の子がいたよ」のようなまとまりをもっている。(21) では、その中の「髪の毛の長い」という修飾語が、述語要素よりも右側の文の最後に、談話上あまり重要でない付加的な情報をもつ要素として置かれている。書き言葉では、(21) のように修飾語を修飾先となる名詞よりも後に置くことはできない。

### キーワード：

ぶんたい か ことば はな ことば ぶんまつひょうげん ごい しゅくやく こうちぶん  
 文体 書き言葉 話し言葉 文末表現 語彙 縮約 後置文

\*\*\*\*\*